

[図画工作・美術]

意欲を持ち主体的に表現活動に取り組む生徒を育成する授業 －美術における3つの「対話」を通して－

巻口 礼子*

1 研究の目的

次期学習指導要領の改訂に向け、新しい学力観が示された。それにより私たち教師には、急激な社会変化の中でも、様々な人と関わり、自らの人生を切り開き、新たな価値を作り出しながら持続可能な社会を創造していくことのできる力を子どもたちに育成することが求められる。教育課程企画特別部会における論点整理に、アクティブラーニングの視点からの学習・指導法の改善が示されている。田村学は著書『授業を磨く』の中で、未来社会に生きる子どもに必要な学力は汎用的能力であり、これを育成するのに主体的で協同的な探求の学びが欠かせない¹⁾としている。そのために授業の質的転換を図る必要があるとし、それを具現するのがアクティブラーニングだと述べている。これらのことから、アクティブラーニングの視点として「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」の実現ができる授業がカギとなる。

しかし協同的な学びや言語活動を授業の中に取り入れる時、美術科の教科特性として、表現活動の技能面においてこの関わる、対話するという活動が難しい。この点については石井英真が『今求められる学力と学びとは』の中で、言語活動や話し合い活動が、特に技能教科において教科で身につけるべき技能的資質・能力と結びついていない場合があることへの危惧²⁾について述べている。これまで筆者も、言葉を通して関わり合う活動で技能面の力も育成することは難しいと捉えてきた。美術は表現の教科である。表現されたもの、つまり作品は言葉にならない思いを色彩や形、素材、光、映像などによって表し、時には言葉以上の力をもって語らずとも見る者に訴えかけたり衝撃を与えたりすることがある。

一方、美術科の教科特性として「対話」を考える時、筆者はそのような言語のない表現（作品）との「対話」は欠かせないものであると考える。また、溝上真一は、著書『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』で、アクティブラーニングの定義について述べている。それによれば、アクティブラーニングは「活動への関与と、活動に関連する認知プロセスの外化、その十分な協奏³⁾があるものとし、この認知プロセスを「認知心理学の枠組みを参考にし、知覚・記憶・言語・思考といった心的表象としての情報処理プロセス⁴⁾」としている。そして、このような「情報処理プロセスは学習においては頭の中で起こっていると考える⁵⁾」と述べている。私たちは表現されたものから何かを感じ取ることによって、その感じ取ったものを自分の中で反芻したり、これまでの経験や頭の中にある様々なものと関わらせたり、結び付けて新たなものを生み出したりと思考する。筆者は、この自己との「対話」によって思考も技能も深められるのではないかと考える。他者と関わり、自分の見方や考え方を広げていく他者との「対話」はもちろんとし、「対話」によって思考を活性化させるというアクティブラーニングの本質を捉えると、教科特性を十分ふまえた有効な美術科のアクティブラーニングの在り方や手法が見えてくるのではないか。平成27年6月30日に当時の下村文科大臣に提出された美術教育連絡協議会の『美術教育の充実に向けての要望書』には、美術教育が新しい学力観に沿い、求められる資質・能力を育むことを具現している教科であることが述べられている。その中で美術教育は「社会的スキル」を獲得することに寄与するとして、「美術を通じたコミュニケーションは、作家のアイデア、作品のテーマ等をただ伝えるだけでなく、感動や感情（喜びや悲しみ、緊張や安堵等）を参加した人々に喚起する効果をもち、実感を伴ったコミュニケーションを可能にします。それは人と人が交流するというコミュニケーションの原点⁶⁾」とも述べている。そこで、このコミュニケーションを可能にする美術科の「対話」とはどうあるべきか、また、それを生かした、生徒が意欲を持って主体的に表現活動に取り組む授業とはいかなるものかを模索したいと考えた。

* 長岡市立東北中学校

2 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

限られた時数の美術の授業の中で、題材の指導目標を達成するための有効な学習の深まりが図られ、なおかつ基本的な技能の習得も狙う。アクティブラーニングの理論を踏まえ、題材の過程の中に深く思考する活動、対話する活動を盛り込み、それらの活動によって主体的に学習活動に取り組む生徒の姿を目指す。

(2) 研究の方法

題材の過程に対話の場面を位置付ける。その対話の中でも、他者と対話する場面、作品と対話する場面、自己と対話する場面の3つの「対話」を設定する。また、その場面を本制作の前に、試しの小作品制作の後に設定して繰り返すことで、思考を深めるとともに技能の習得を図る。その小作品を媒体として3つの「対話」の場を設ける。生徒の様相は、活動の様子を観察と生徒の振り返りの記述と、制作した作品から考察する。それぞれの対話による生徒の思考と表現の変化を見とり、3つの「対話」の有効性と生徒の授業に取り組む姿勢の様相を検証する。3つの「対話」の場面設定と方法は以下のとおりである。

〈他者との対話〉

試しの小作品を制作した後、互いの小作品を見合う相互作品鑑賞の場を設定する。小作品について聞きたいと思ったことを相手にインタビューして自由に話し合わせる。

〈作品との対話〉

試しの小作品を制作し、完成した作品を学級全体で机上に並べ、生徒同士が自由に互いの小作品を見て回れる場所と時間を確保する。仲間の作品はどのような表現になっているか、自分の作品とも比較するなどして小作品を見て考えさせる。

〈自己との対話〉

試しの小作品の鑑賞をした後に振り返りの時間を設定する。他者、そして作品と対話したことを整理し、自分自身の思考や技法の獲得をメタ認知する場にする。小作品を見て感じたことや考えたこと、思いついたこと、インタビューした内容、自分もやってみたいと思ったことなどを記述させる。

なお、3つの「対話」の関係は、図1に示すように〈他者との対話〉と〈作品との対話〉は同時並列に先行し、そこでの内容を持って、前出2つの対話の後に〈自己との対話〉を個人内で行うものとする。

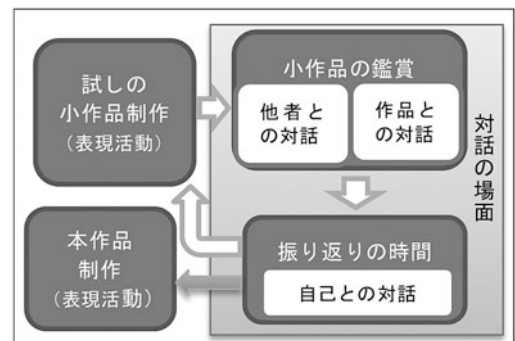


図1 対話のサイクル

3 研究の概要

(1) 題材名「心でとらえたイメージ」〈第2学年〉

(2) 題材の目標

自分がとらえたイメージを広げ、豊かな色彩と多様な形や技法による表現方法を試行錯誤し、自分の思いや考えを工夫して表す。

(3) 指導計画 (全11時間)

学習の場面	生徒の学習活動	教師の働きかけ
導入	岡本太郎の「躍動」を鑑賞し、どんなことが表現されているのか考える。	岡本太郎の作品を中心に鑑賞し、抽象的な表現への関心を高める。
試しの場面1 柔らかい画材を使用	柔らかい画材を使用し、自分でテーマを選択してそのイメージを色と形で表す小作品を制作する。	新しい画材を取り上げ、表現の多様性に触れさせる。新しい画材の基本的な技能を習得させる。
〈対話の場面1〉	作品との「対話」として、仲間の試しの小作品を見合う。他者との「対話」として、小作品について聞きたいと思ったことを作者にインタビューする。自己との「対話」として、仲間の作品を鑑賞して感じたことや考えたこと、インタビューした内容などを書きとめる。	3つの「対話」の場面を設定する。
試しの場面2 しっかりとした画材を使用	しっかりとした画材を使用し、『感情』をテーマにして、ある感情のイメージをモダンテクニックの技法を主に使いながら色と形で表す小作品を制作する。	使い慣れた画材を取り上げ、モダンテクニックを中心とした表現の多様性を試させる。モダンテクニックの基本的な技能を習得させる。

〈対話の場面2〉	作品との「対話」として、仲間の試しの小作品を見合う。他者との「対話」として、小作品について聞きたいと思ったことを作者にインタビューする。自己との「対話」として、仲間の作品を鑑賞して感じたことや考えたこと、インタビューした内容などを書きとめる。	3つの「対話」の場面を設定する。
本作品の制作	試し1, 試し2でやったこと, 対話1, 対話2で感じたこと, 考えたことを基に自分の表現を作っていく。	これまでに試してきたことや見聞きしてやってみようと思った表現を実践する場を設定する。
表現の価値付け	自分の表現に題名と解説を付ける。	生徒各自に表現の意味を持たせる。
相互鑑賞 振り返り	互いの表現を見合い, 感想をまとめる。	他者の表現に触れ, 互いの表現の面白さを感じ取らせる。題材を通してどんな学びがあったのかを振り返らせる。

(4) 場面ごとの生徒の様相

各場面で生徒がどのような様相を見せていたか、3名の生徒を抽出してその様子を記録する。3名の抽出生徒はそれぞれ課題に素直に向き合い、丁寧な作業をする生徒である。しかし自分の構想を組み立てるのも早く、それだけを基に作り進めていく傾向が見られるので、対話によって思考や表現に変化が表れることを期待し、学習の深まりを見ていく。

① 試しの場面1

この題材に取り組むにあたって、多様な材料を使って幅広い表現ができるようになることを狙いとして、まずパステルや色鉛筆などの柔らかい描画材を中心に使用して試しの小作品を制作した。小作品を作ることによって、個々に技能を習得することを狙うとともに、小作品を媒体として3つの「対話」の場面を設定する。生徒が慣れていない抽象的な表現に挑戦する場面でもあるので、条件として具体的なものは一切描かないことと、授業者が提示する幸福、希望、和やかなどのいくつかのテーマから選択して表現することとした。この条件によって3つの「対話」の場面で、生徒がそれぞれに考えた抽象的に表すためのアイデアや工夫、同じテーマでも発想の違いや表現の違いなどが表れ、見方や考え、様々な技法の在り方が広がることを期待した。

② 〈対話の場面1〉

生徒はまず、教室に広げられた全員の小作品を一つ一つ自由に見ていった。小作品を見ただけでは分からないことは互いに聞き合うように助言すると、教室のあちらこちらで小作品についてその作者と言葉を交わす姿が見られるようになった。話し合っている内容は以下の事柄が多かった。

・自分がしなかった技法のやり方 ・色の作り方 ・発想, アイデアの出し方 など

自己との対話の場面での抽出生徒の振り返りの記述は以下のようなものであった。

- A: 同じテーマでもただ明るくした私の作品と違って、暗い中に光があるみたいなのがあって、テーマのイメージがより表されているなと思った。浮かんイメージがあっても、もっとよくなるか、違う視点から見ようと思った。ふわふわした感じのよりも、しっかり形がある方がおもしろいなと思った。私も試してみたい。
- B: パステルでもこすったりしてグラデーションを作れると分かったので、とてもきれいでやってみたいなあと思いました。また、私は形が丸とかばかりだったけれど、四角や三角などの形もいいなあと思ったので、いろいろな形を使ってみたいです。似たような色ばかりでなく、いろいろな色を使うことによって、カラフルな感じを表せるし、消しゴムも有効に使うといいなあと思ったので、いろいろ参考にしてみたいです。
- C: 色を塗ったところを消しゴムで消すことで、よりふわふわした軽い感じが出ることが分かった。形をうまく使うことで、伝わりやすくなったり、人によって感じ方に違いが出たりすることも分かった。また、以前習ったグラデーションなどを使うことで、よりおもしろい作品に仕上がると思う。
(下線: 筆者加筆)

下線部からは、自分以外の生徒の表現に触れ、自分の中にある表現の在り方や技能面での方法を知ったという内容が見とれる。技能面においても、小作品と対話し、他者と対話する中で新たに獲得していることや広げていることがあることが分かる。それらを自己との対話として記述することで自分と他者の表現を比較し、思考を深め、下線部にあるように試してみたい、やってみたいという次の表現活動への意欲につながっていったものと分析する。

③ 試しの場面2

試しの場面1に対し、しっかりと彩色できるアクリルガッシュなどの使い慣れた画材を用いての小作品を制作した。試しの場面1と同様の条件に加え、〈対話の場面1〉の振り返りで記述したことをふまえての活動を促した。生徒は〈対話の場面1〉で自分の中になかった表現の在り方や技法の使い方が分かることが分かり、様々な技法に挑戦してみたいという意欲と、テーマをいろんな視点で捉えてみようとする姿勢が出てきた。表し方がおもしろいかどうか、実際に

(5) 学びの深まり（生徒の表現の変容）の考察

以下に、抽出生徒A, B, Cそれぞれの「ア 試しの小作品1」「イ 試しの小作品2」「ウ 本作品」を示す。

① 抽出生徒Aの表現の変容（図4）

ア→イ→ウと、技法も色数も増えていっている。ウでは、〈対話の場面2〉での自己との対話で記述していたカラフルな色遣いでポジティブ、にぎやかさといった様子を表していることが分かる。また、同じく記述していたドリッピングやドライブラシの技法も実際に使われている。抽出生徒Aは作品との対話と他者との対話を通し、多くの技法に触れ、そのよさや効果を感じ取り、自己と対話する中で自分が使いたい技法を考えて選んだり新しく取り入れたりしていったものと思われる。本作品を作った後の抽出生徒Aの題材の振り返りは次のものであった。

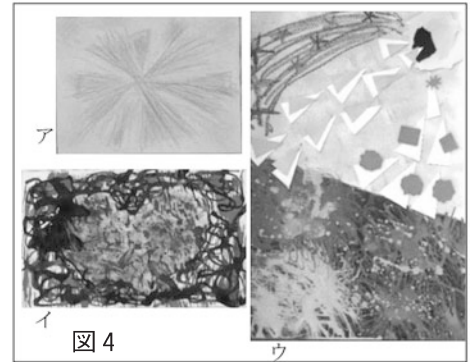


図4

たくさんの技法、たくさん色、たくさん形で、本当に色々なことがあるにぎやかな夏休みを表すことができたと思う。もっとできることがあったなと思ったから、次回の作品に生かしたい。

抽出生徒Aは作品との対話、他者との対話によってそれまでの自分より多くの技法と色と形を獲得し、表現することができたのではないかと考える。さらに抽出生徒Aは、本題材で満足せず、もっとできたであろう可能性を自分の中に感じ取り、次の題材への意欲として見せている。

② 抽出生徒Bの表現の変容（図5）

抽出生徒Bも、ウの本作品に〈対話の場面2〉の自己との対話で記述していた技法がいくつか使用されているのが分かる。カラーージュの表現、黒い色の上に明るい色、黒と明るい色の境目で気持ちの変化、といったことが表現されているのが見とれる。抽出生徒Bの振り返りは次のものである。

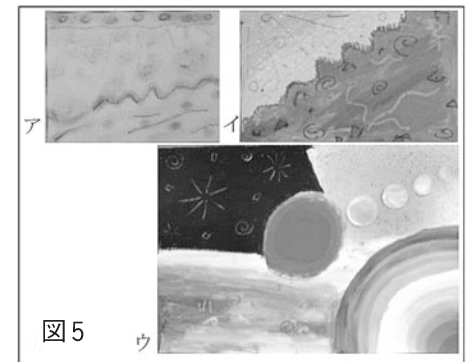


図5

初めて抽象画を描いてみて、世界が広がるなと思いました。また、同じテーマでも人それぞれで見方が違うから、鑑賞がとってもおもしろかったです。習ったことを生かしていきたいと思いました。

抽出生徒Bは作品との対話（鑑賞）の活動に面白さを感じていた。それは対話の場面で作品と対話することによって人それぞれの表現の違いと多様性に触れることができ、さらに他者との対話で自分と違う見方を知ることができたからと推測する。自己との対話で自分の中になかった表現の広がりを実感し、表現の面白さに気付けたのではないかと分析する。抽出生徒Bも、本題材での学びを次につなげる意欲を見せることが読み取れる。

③ 抽出生徒Cの表現の変容（図6）

抽出生徒Cは、ア、イの小作品では特定の画材と限られた技法を使っていたが、ウの本作品には点描に加えドライブラシ、ドリッピング、バチックなどの複数の技法を使い、大きく異なる形もいくつか描いている。抽出生徒Cは〈対話の場面2〉の自己との対話で、様々な技法を複数使って複雑に表す表現のよさや、異なる色や形を使って感情を表すことに触れており、それが生かされているものと見とれる。抽出生徒Cの題材の振り返りの記述は次のものである。

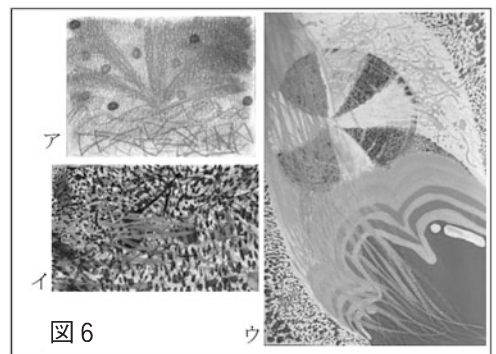


図6

具体的な絵を描かずに表現することは難しかったけど、その分おもしろい見方がたくさんあるということが楽しかった。また、技法などの身に付いた力も、忘れずに積極的に使っていきたい、よりよい作品を使っていきたい。

抽出生徒Cは〈対話の場面1〉の自己との対話でも人それぞれの多様な見方に触れており、対話の場面を重ねることでその面白さを実感していったものと思われる。また、技法について自分が習得したことを自覚しており、これからの表現活動に活用していく意欲として記述している。作品と他者と対話を繰り返す中で、多くの技法と多様な見方に触れ、自分の学びとすることができたものと考えられる。

題材の最後に、3つの「対話」の場を繰り返して設定したことへの生徒の反応を分析するため、アンケートを全ての学級で実施した。質問事項は〈対話の場面1〉〈対話の場面2〉に関わって以下の項目を設定した。

(質問1) 仲間の小作品を鑑賞する活動は自分にとってよかったか。
 (質問2) 小作品について聞いてみたいと思ったことを仲間に聞き、自分の表現に生かしたか。
 (質問3) 仲間の小作品を鑑賞して自分もやってみたいと思ったり新たなアイデアがひらめいたりしたか。
 (質問4) 仲間の小作品を鑑賞した後の作品作りでは、聞いたことや考えたことを参考にして迷わず進められたか。

選択肢は ①よく当てはまる ②まあ当てはまる ③あまり当てはまらない ④当てはまらない とした。

質問1	61.7	34.2	2.9	■①
質問2	33.5	34.4	23.8	■②
質問3	61.4	32.9	3.9	■③
質問4	52.4	42	3.8	■④ (%)

質問1の①②の数値が95%を超えることから、作品との対話は生徒にとって表現活動の参考になったと言える。質問3の①②の数値も94%を超え、作品、他者との対話の後の自己との対話によって表現方法などの思考が深められたものと考えられる。質問4の①②の数値も94%を超えることから、3つの「対話」により、自分の考えで作り進めることができた生徒が多かったと分析する。一方、質問2の①の数値が大きく下がり、③の数値が上がっている。③を選択した生徒に「聞きたいことがあっても聞けなかった」という記述が多かったことから、他者との対話にはその有効性に課題が残る。

4 成果と課題

(1) 成果

- 限られた美術の授業時数でも試しの作品制作は短時間ででき、その試しの中で使い、見聞きした技法が本作品に生きる。また、試しの制作によって技能の習得が図られる。さらに異なる技法を試した仲間の小作品を鑑賞することで一層技法への理解が広がり、生徒が相互に技法を学び合うことへの意欲が高められた。
- 対話のサイクル(試しの場面1→対話の場面1→試しの場面2→対話の場面2)は、作品との対話、他者との対話、自己との対話が、最初のサイクルをベースにして、試しや対話を深める機能を持つことが確かめられた。また、試しと対話を一度やっていることによって、要領よく学習を進められたり、次の活動への意欲となったりし、見通しをもった学習になる。対話によって生徒が新たな技法を獲得したり、思考が前段階より深められたりする姿が表出した。
- 3つの「対話」について
 - ・作品との対話により、自分も試してみたいことや自分が試さなかった技法への関心が広がり、次の活動への意欲化が図られる。
 - ・他者との対話により、自分が試さなかった技法や自分の中になかった異なる発想や表現の捉えがあることに気付くことができる。他者と言葉を交わすことで技法や発想の仕方が一層理解され、意欲へとつながる。
 - ・自己との対話により、自他の表現から獲得したり感じ取ったりしたものをメタ認知し、次はどうしていききたいかという見通しと意欲を持たた。それによって、自分から活動に向かおうとする主体的な姿勢が育まれる。

(2) 課題

- アンケートの質問2の③の数値から、他者との対話の場面で技法や発想について知りたいことがあっても他者に聞くことが難しい生徒に対し、他者との対話に向かわせる働き掛けや活動の工夫が必要である。
- 自己との対話は振り返りとしてワークシートに記述する方法であったが、各対話で何を獲得しているのか、どんなことが深められているのかを詳細に見とれるよう、振り返りの項目の改善を図る。
- 本題材は抽象的な表現であったので試しの作品制作が有効であったと思われるが、他の題材でもこの3つの「対話」が有効に使えるかを検証したい。

〈参考文献〉

- 1) 田村 学『授業を磨く』東洋館出版社、2015年、pp8-43
- 2) 石井英真『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』日本標準ブックレット、2015年、pp46-47
- 3) 4) 5) 溝上真一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014年、pp6-12
- 6) 美術教育連絡協議会『美術教育の充実に向けての要望書』2015年